HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈小人書林迷走録〉第５回 〈上吐下瀉〉あるいは痰壷と馬桶のある風景 : 衛生知識宣伝連環画に迷いたい！
Author(s)	武田, 雅哉
Citation	連環画研究, 3, 120-137
Issue Date	2014-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98403
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98403
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_3_120-137.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

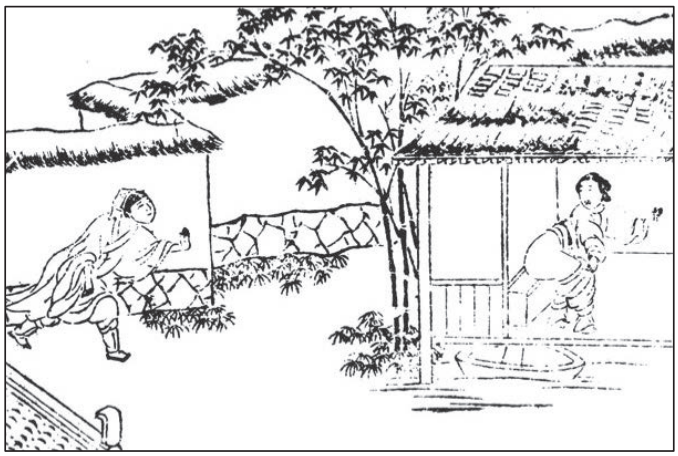
『連環画研究』第３号　2014年３月
〈小人書林迷走録〉第５回

〈上吐下瀉〉――あるいは痰壷と馬桶のある風景
――衛生知識宣伝連環画に迷いたい！

武田 雅哉

1980 年代の初頭、北京に遊んでいた筆者には、北野君という友人がいた。理系のかれは、中国の都市における糞便の流通を研究していたが、かれのことを、「糞尿博士」の中村浩や、『厠考』『厠史話』『厠風土記』『厠まんだら』など膨大なトイレ本の著者で知られる「トイレット博士」の李家正文（りのいえまさふみ）につづく、その筋の逸材なりと見なした筆者は、「糞便博士」との称号で呼ぶことにしていた。いまの自分に少なからず影響を与えているに相違ない北野君に刺戟を受けて、筆者も、中国各地の旅先の便所に注意を払うようになり、落書きを写真に撮ってみたり、田舎の公衆便所の構造を、そこでしゃがみこみながらスケッチしてみたり、またそこで、ブタとの美しい「不意の出逢い」があったり、はたまた上海の日本人学校で理科教師のアルバイトをしていた時には、小中学生の生徒諸君に「中国の糞尿とお便所の研究」と題する講義をして、マジメな校長を激怒させたり……。〔下図はその際の講義でも使用した『金瓶梅』の挿絵〕

いずれにせよ、中国というところは、なかなかおもしろい便所・糞便文化の宝庫であることは、否定できない事実であろう。ちなみに北野君の当時の研究成果は、いま『アジア厠考』（大野盛雄・小島麗逸編著、勁草書房、1994）に、北野尚宏「中国――一九八〇年代初頭の都市屎尿の農村還元」と題して収められている。北京と上海という中国の二大都市と、その郊外の農村との壮大なる糞便の流れを詳細に調査したそれは、まごうことなき、正真正銘の黄金に輝く「クソ論文」なのであった。



科学啓蒙のシリーズ

そういう友人がいたこともあって、留学時に購入した本には、まっとうな文学書はあまりなく、いわゆる「科学知識啓蒙」ものが多かった。中国では「科学普及」文芸（略して「科普」）と称されるものである。この科学知識の普及というお仕事は、この巨大で複雑な国家をまとめるための、永遠に終わらない国家的事業であるようだ。

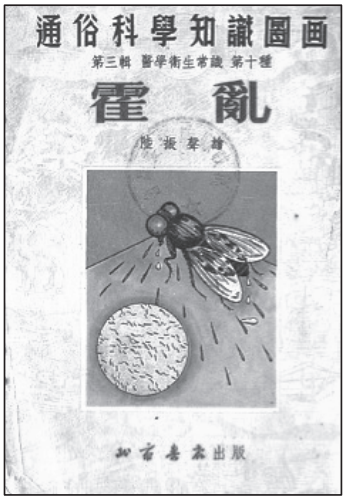
建国初期に刊行されていた図解の叢書に「通俗科学知識図画」がある。目録を見るかぎり、第１輯「農業知識」、第２輯「自然科学知識」、第３輯「医学衛生知識」、第４輯「史地常識」とあり、「全部で六十余冊」を予定していたようだ。1951 年から 54 年にかけて北京書店から刊行されている。縦長の 32 開本で、今回のテーマに関連の深い第３輯「医学衛生知識」は、二十四冊のタイトルが目録に載っている。

これらには、伝染病と、これを広める害虫に関するものが多いようである。その絵図には、おもわず目を奪われてしまうのだが、やがて体じゅうがかゆくなってきて、読んだあとは、かならず手を洗ってしまう、そんな迫力を持っている。

かつて〈お便所および用を足す人物〉という題材を描いた絵画の大展覧会はできぬものかと、いくつか集めてみたことがあるが（『中国乙類図像漫遊記』大修館書店、2009）〔下図　『児童必需　国民字課図説』（1915）より〕、それをさらに補強できそうである。とはいえ、べつに「お便所」だけではない。しかしながら「お便所」は、伝染病が広がる主要なルートであり、また罹患者がたどりつく、安息の地のひとつでもある。今回は、そのような作品たちのために、ささやかな画廊を提供したい。



〈上吐下瀉〉の画廊



『霍乱』（陸振声/絵画、1952 年 6 月 2 版）の表紙を飾るのは巨大な蝿である。霍乱とはコレラのことだが、顕微鏡で見たコレラ菌が、円形の中に描きこまれている〔右図〕。この叢書の何冊かの絵を担当している陸振声が描く人物は、頭部が大きく、えもいわれぬ一種の画風を具している。「だれかが霍乱を患うと、さらに霍乱菌が吐瀉される」というキャプションのある絵〔下左図〕では、馬桶に座り込んだ男が、床に向けて腹中のものを放出し、奥さんとおぼしき女性が、痰壷を持って「ここに出しなさい」とでも言っているような情景が描かれている。





似たような絵はまだあって、こちらは痰壷に向けて正しく吐かれている〔上右図〕。「上から吐いて、下から瀉して、おなかの中はゴロゴロと、でも痛くはない。吐瀉物は米のとぎ汁のよう。これは腸の中の粘液と上皮の剥落片なのである」とのキャプションがある。

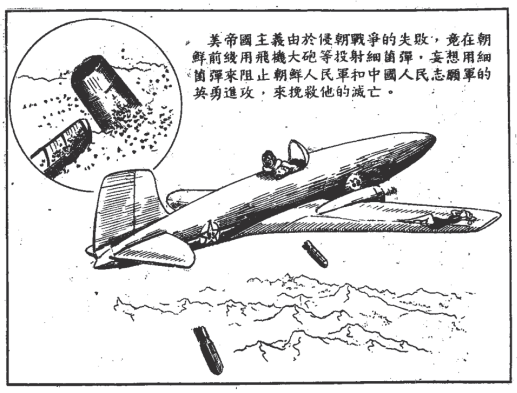
最後のページには「霍乱菌伝染図解」があって、注意すべきことが図解されている〔右図〕。ここにも〈上吐下瀉〉を演じている、げっそり頬肉の落ちた男を頂点にして、菌が口から体内に取り込まれるルートが描かれている。〈上吐下瀉〉という画題は、美術史の世界では滅多に見ることのできないが、衛生観念画にのみ顕著に見られる、たいへん貴重なものであろう。

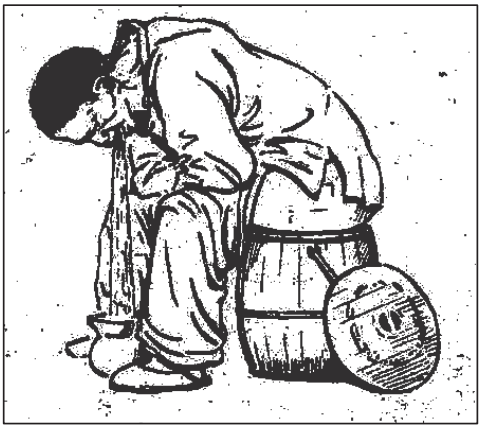


アメリカ帝国主義にもご注意

『害人的細菌和蟲』（人を害する細菌と虫）（王企玟/絵画、1952 年 6 月）では、細菌という小さな悪魔の恐ろしさが、ヨーロッパでのペストの大流行などの事例とともに説かれ、各種の疾病が 顕微鏡を通して見た細菌の姿とともに紹介される。日本の「七三一」細菌部隊のことも紹介され、この実験による死者が三千人あまりに及んだことが記されている。また細菌兵器の開発と使用は、いまでは「アメリカ帝国主義」の手でおこなわれていることを、やや詳しく紹介し説明し、警鐘を鳴らしている〔下左図〕。

〈上吐下瀉〉図はここでも使用されているが、『霍乱』よりは筆致がリアルであり、じつに痛々しい〔下右図〕。



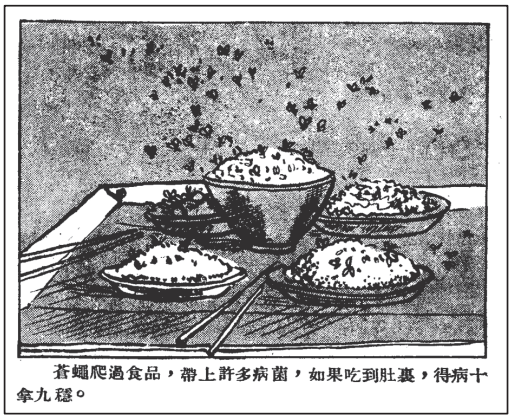


共産党による衛生運動は、建国前から提唱されていたが、建国後は、全国にわたって展開され、朝鮮戦争時期には、細菌戦への警戒も加え、「除四害」運動として、それぞれの時代において展開していく。ちなみに初期の四害は、蝿、蚊、鼠、雀だが、のちに雀がシラミにとって替わられるなど、時代に応じて選手の交代が見られる。

『夏秋衛生常識』〔右図〕は、「通俗科学知識図画」ではないが、50 開本の連環画で、表紙の下方に「河南省人民政府衛生庁印製　1951.8」とあるだけで、奥付はない。配布されたものか。表紙には「上海市人民政府　衛生局秘書処　直属衛生科」の蔵書印が見える。本書のテーマは、表紙にデカデカと描かれた蝿と蚊とに明らかであろう。やつらの害を訴え、やつらを打倒するための戦略を伝授するものだ。







黴菌だらけのバッチイ手で、食べものを口にする子ども〔上左図〕。無数の蝿が乱舞する食卓での食事〔上右図〕。日ごろの不衛生な生活によって病気になり、一日に数十回もトイレに駆け込むようになったおじさん〔下左図〕。公衆便所でも、糞便には土をかけて蛆が涌かないように気をつけなければならないことを説く〔下右図〕。





霍乱の賦

建国初期には「大衆科学図説」というシリーズも、「大衆科学社/出版、上海華東書店/印行、連聯書店/総発行、聯営書店・通聯書店/分発行」という形で刊行されていた。総発行の連聯書店とは、1950 年に組織された上海連環画聯合書店の通称で、福州路 540 号にあり、二十数社が参加して連環画の刊行に携わった書店である。このなかの一冊『害蟲』(薛鴻達/主編、周紀倫、洪黎民/撰文、張守成/絵図。1950 年 10 月再版)を見てみよう。作画担当の張守成 (1918〜) は、呉湖帆門下の上海出身の画家である。

『害蟲』の裏表紙には、「新時代出版社・大衆科学社　徴求連環図画文稿画稿啓事」として次のような内容が書かれている。建国初期連環画の摸索が見て取れる。

本社は、広範に出版される連環図画の内容を、いっそう広範に充実させたいという見地から、特別に文稿と画稿を公開で募集するものであります。およそ「科学的、大衆的、民族的」であり、自然科学、社会科学、政府の法令と政策、国内外の時事、解放軍の戦績、民間故事、大衆文芸などの作品であれば、創作と改編を問わず、すべて歓迎いたします。ひとたび原稿が採用されれば、原稿料ははずみたいと存じます。もしよろしければ、「上海大沽路三八三弄四十号華東書店」までお寄せください。

『害蟲』の表紙を飾っているのは、広大な田畑の上空を飛行するイナゴの大群である〔右図〕。内容は、各種の害虫の被害と、これを撲滅する方法の図解である。

本書においても、細菌を撒き散らす蝿と、それによって感染する「霍乱」が紹介されていて、すでにおなじみの〈上吐下瀉〉をテーマとした絵が描かれている〔下図〕。余白に書き込まれた画讃は、激しい〈上吐下瀉〉の様子を詠じた「霍乱の賦」さながらである。





〽 げにおそろしきは霍乱病。
蝿とともに来たる霍乱菌。
遠ち近ち飛んでひと休み。
食べ物みつけてひと休み。
おなかに入れたら霍乱病。
上から吐いてとどまらぬ。
下から瀉してとどまらぬ。
いますぐ病院ゆかぬなら。
あっというまに御陀仏よ。

一見小粋（こいき）な料理人



『飲食衛生』（上海市人民政府衛生局/編文、金立徳/絵図、新美術出版社/出版、1952年9月、40開）は、そのタイトルどおりで、汚いものを食べるとどうなるか、そうならないためにはどうすればよいのかを、図解してくれた本である〔右図〕。その第2頁には「飲食衛生工作を徹底的におこない、アメリカ帝国主義の細菌戦を粉砕しよう」と描かれているが、基本的には食堂や家庭での衛生観念の啓蒙である。

食品衛生上、してはいけない行為には、大きな×印が描かれているので、わかりやすい。ひとつ例を挙げておこう。調理場のおじさんは、調理中にタバコを吸ったり、頭のフケをぼりぼり掻き落としたりしてはいけないのである〔右図〕。タバコを吸いながら調理するおっちゃんは、こんにちでもしばしば見かける。ちょっと粋でカッコよくも見えるのだが、食物を汚染し、不衛生であると言われれば、たしかにごもっともである。





「不衛生」によって招かれる悪果を描いた絵を掲げておく〔図左〕。右上の寝込んでいる人が「傷寒」、右下の馬桶に坐る女性は「赤痢」、そして左の男は「霍乱」を、それぞれ患っている。くだんの〈上吐下瀉〉のテーマが、ここにもあったので、ご鑑賞いただきたい。

らぶらぶ蚊ップルの恐怖

さて、害虫四天王のうち、蝿のお次にひかるのは、蚊である。

『撲滅蚊子』(「衛生科学知識画庫」、葉昭燄、秦侠農/編輯。房公秩、佰惟志、周吉士等/絵画。影華出版社出版・通聯書店総発行、28開、1952年7月)は、まさにタイトルどおり、蚊と戦うためのマニュアルである。その「前記」には次のようにある。



蚊は、われわれの健康を破壊するものであり、かれらは単にわれわれの血液を吸うだけでなく、多種多様な疾病をわれわれに伝染させるのである。(中略)

この小冊子は、これらの蚊が、どのようにしてわれわれに危害をおよぼすかについて、概括的に説明を加え、さらに蚊を撲滅すべき有効な方法の紹介にも力を入れたものである。

医学界の調査によれば、「わが国の過去において、毎年、蚊によって受ける損失は、165,000,000人が、一日仕事を停止するのに等しい」という。この数字は相当に厳重なものであり、とりわけ今日においては、われわれは偉大な建設高潮の時に当たっており、生産事業に対する影響は、たいへん大きい。(中略)それゆえ、蚊は小さいが、これを過小視することはできないのである。

蚊は、われわれの生産建設の敵である。やつらの破壊活動の力は小さいものではない。われわれは、決然として蚊を撲滅しよう!



本書からは、一点だけ図解を紹介しよう。この図は、夫婦(めおと)の蚊がラブラブな様子を、ハートマークによって表現しているものである。この、仲むつまじい夫婦が子宝に恵まれ、春から冬にかけて十世代が繁殖したとしたら、「49,684,682,838,285,137,698」匹という天文学的な数の子孫を残すことになりますという驚愕の真実を示しているものだ。ほんわかした表現ながら、戦慄的な図解である。

黒熱病の恐怖

害虫による被害と、その対策を、単なる図解ではなく、物語に託すのも、連環画らしい手法であろう。

「通俗科学知識図画」シリーズの『白蛉子和黒熱病』（白蛉子と黒熱病）（芮光庭/絵画、1953 年 3 月）は、白蛉子（チョウバエ）が媒介する「黒熱病」（カラアザール、脾臓肥大）についての啓蒙書である〔右上図〕。



物語の舞台は解放前の河東にある張家荘。その夏、村人の多くが、ある奇病を患った。咳と鼻水、発熱と皮膚の痛みなどの症状があり、体は熱くなったり冷えたりを繰り返す。やがて体力がなくなり、腹部が膨張してくる。なにか硬いしこりがあるようだ。手当たり次第に薬を飲んでも、神仏に祈っても効果はなく、病人は、数か月から、長くても一年ほどで死んでいった。



張大力夫妻には、胖頭（ぱんとう）と呼ばれる五歳の息子がいた。ある夜、胖頭が虫に足を噛まれた。叩いてみると、一匹の白蛉子が死んでいた。ほどなくして、胖頭は謎の病気を発症し、腹がふくらんできた。多くの村人が死んでいったのを知っている両親は、気が気ではなかった〔右中図〕。



その冬、河東一帯が、解放された！　村人は、解放軍と共産党の幹部を歓迎した。人民政府は、この地域の奇病の存在を知るや、すみやかに実態を調査し、これを上級に報告した。作業を見守る毛主席の御真影〔右下図〕。

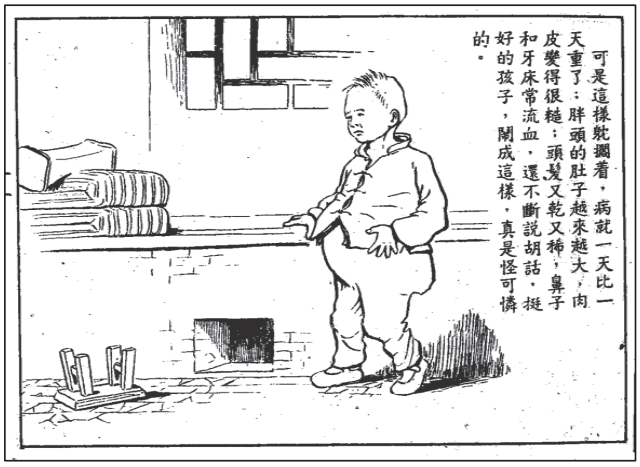
幹部の王同志は、病人を病院に入れるよう、村人を説得して回ったが、張の両親は、西洋医学を恐れて、胖頭を入院させようとしない。胖頭の腹はますます大きくなり、皮膚は荒れ、髪は乾き薄くなり、鼻と歯茎からは血を流すようになった〔右上図〕。

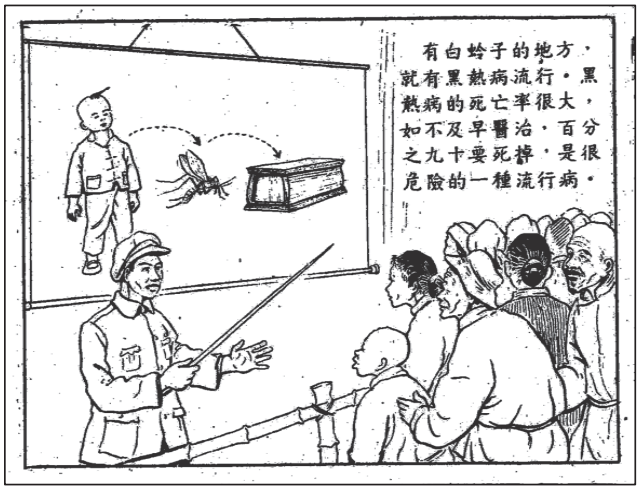
そのころ、政府は医療隊を村落に派遣した。張家荘でも小学校に臨時診療所が設けられた。胖頭の両親も説得され、診療所に息子を連れていき検査を受ける。その結果、白蛉子によって伝染される黒熱病であることが判明した。

人民政府は「黒熱病図片展覧会」を開催して啓蒙につとめ、治療の必要の周知と、白蛉子の撲滅作戦が図られた〔右中図〕。

趙利家の幼い息子も罹患していたが、親は医者に見せようとしなかった。やがて口の周囲が腐れ落ち、手遅れとなってしまう。「どうしたらいいの！」と泣く母親。「おまえが悪いんだ！　息子をむざむざ殺しやがって！」と妻を責める父親〔右下図〕。

医療隊が張家荘を離れるその日、趙の息子が入った小さな棺が、野辺に送られていった。みんなはこれを見て、かわいそうにと、口々に言いあったのであった。







痰は許さん！──衛生戦線のこどもたち

衛生観念の普及が、おとなだけでなく、こどもたちに向けても宣伝されたのは、当然であろう。新中国の「花」であるかれらは、不衛生を容認する旧習から守られるべきものであるとともに、新しい衛生観念の、頼りになる宣伝者でもあった。



『衛生戦線上的小英雄』(衛生戦線の小さな英雄)(上海市結核病中心防治所・中国防癆協会上海市分会。1959年1月)〔右図〕は、64開の、いわゆる連環画サイズながらも、全頁カラーの非売品である。表紙の下方には、「請勿随地吐痰！」の六文字が三度繰り返し印刷されているから、まさしく「みだりに痰を吐いてはいけません！」がテーマなのであろう。

痰を吐かないことは、環境を清潔にするだけでなく、痰の中にいる細菌を伝播させないことにもなる。少年先鋒隊の小明(シャオミン)は、拡声器を手に、街角でこれを訴えていた。訴える相手は、旧社会の悪しき教育を受けた先輩たちである。若き新世代は、かれらの蒙を啓いてやらねばならないのである。

「親愛なるおじさんたち、おばさんたち。みだりに痰を吐いてはいけません。痰を吐くのは悪い習慣です。痰を吐くのは細菌を散布し、病気を伝染させることになり、わたしたちの体の健康に悪い影響を与えます！」小明はきょうも宣伝活動。

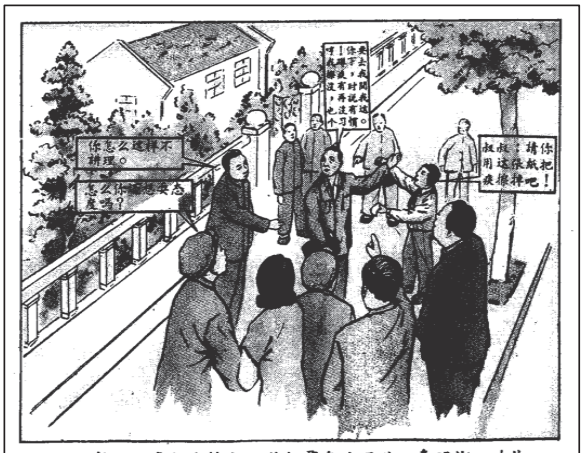
そんなとき、ひとりの「親愛なるおじさん」が道に痰を吐きました。これを発見した小明は、親愛なるおじさんを追いかけて説得します。ところが、親愛なるおじさんは、「道に痰壷がないのだ。道に吐かないで、どこに吐けというのだ？」と反論します。

「おじさん、この紙で痰を拭きとってください！」〔右図〕



(5)小明請行人擦掉地上的痰。

小明は、肺結核などの菌が痰に含まれていることを説明しました。
「だっておれ、肺病なんかじゃないもん。細菌なんかねえよ」と、なおも抗弁する、親愛なるおじさん。
小明は根気強く説得をつづけます。
「これは公衆道徳であります。みんながみんな、肺病じゃないからといって痰を道に吐いたら、愛国的衛生観念はどうなるのでしょう？」
おじさんはそれでも痰を拭こうとしません。騒ぎに気づいた道行く人びとも、やがて山をなし、おじさんを囲んでの批判大会とあいなります〔右上図〕。
「なんと理不尽な人なのだ！」
「公衆道徳を守りなさい！」
怒り狂った民衆のひとりが、ついにおまわりさんを呼んできました。影とともに迫る、おまわりさん〔右中図〕。
おまわりさん「はい、事情はわかりました。さて、こんなかたには、どうしてもらうのがいいでしょうねえ？」
みんなは彼を指さして、口々に、
「批判を受けるべきだ！　反省しろ！」
「壁新聞に書いて張り出すべきだ！」
「派出所にひったてろ！」
「こいつの顔を絵に描いて、街中に貼り、思い知らせろ！」　みんなはそれぞれ、自分がよいと思う懲罰方法を、口々に提案しました〔右下図〕。
最後に、おまわりさんが言いました。
「わかりました。あなたが拭かないの



(8) 行人不肯把痰擦去，引起羣衆的不滿，責問他：「你怎麼可以不遵守公共道德」。


(9) 羣衆非常憤怒，喊民警来教育他。



(11) 羣衆紛紛提出处理办法。

であれば、わたしが拭きましょう。

ところで、あなたの職場はどちらでしょうかな？」 おじさんは口ごもり、「ええと……それは……」

そこにやってきたのが、小明のお母さん。「ご飯だよ」と呼びに来たのです。それが、なんという偶然でしょう、お母さんは、おじさんの知り合いでした。「あら、張さんじゃないの？」

おまわりさんに訊ねられたお母さんが、かれが××という職場の会計の張栄発さんであることを告げますと、張さんも、いささか慌てます。

おまわりさんは、広範な群衆の意見を取り入れ、チョークで痰のまわりを囲み、「これは××の張同志が吐いたものなり」と明記することを提案しました〔右上図〕。

聞くなり、親愛なる張さん、「拭きます！　拭きます！　もう二度と痰を吐きませんてば！」と叫ぶと、とうとう自分の痰を拭きとりました〔右中図〕。

おまわりさんは、小明のお母さんに言いました〔右下図〕。

「同志よ。あなたの息子さんは、まったくすばらしい少年先鋒隊員です。みんながかれのように、真剣に七つの害を排除し、衛生に気を使えば、わたしたちの町村は、すぐにも七害が無くなり、病気も消滅し、人民の体はいっそう健康になり、国家はいっそう強く豊かになるでしょう！」



(16) 民警根据群众的意见，提議用粉筆把痰圈起来，並写出他的名字和工作単位。


(17) 張同志一听到要写他的工作単位，就很着急的說：「我擦！我擦！我下次一定不再随地吐痰了！」


(18) 民警向小明的媽說：同志，你的孩子真是一个好少先隊員，要是人人都能像他一樣認真的来除七害，講衛生，我們的城市，乡村就能夠早日七無，疾病就可以大大的消滅，人民身体就会更加健康，國家就会更加富強了！

さきほどの「四害」につづいて、おまわりさんの口から「七害」が出てきたが、これは、蝿、蚊、鼠、雀に、ゴキブリ、シロアリ、シラミを加えたものである。

よいこが宣伝活動につとめる話は、だいたいこんなものである。いけないおとなをたしなめるというのが、こどもたちにとっては、胸のすく娯楽でもあっただろう。

『少年衛生崗』(陳金富/写　戴敦邦、劉伝鄴、韓伍、毛用坤、斯明/絵図。少年児童出版社、1958年9月。28開）でも、こどもたちは、痰を吐くおとなたちを目ざとく見つけては、執拗にからんでいく〔右図〕。



あるおじいさんが痰を吐いた時には、女の子が駆け寄り、「痰を吐いてはいけません」と書かれたチラシを手渡す。

「きみは本当に毛主席のよいこどもだねえ。きみの話はちゃんとおぼえておきますよ」

と、おだやかに解決する。

また、あるおじさんが痰を吐くのを見つけた、敏文くん。注意をしたものの、おじさんは相手にしない。敏文がしつこく追究すると、「おとなのことにかまうんじゃねえよ！」と返された。

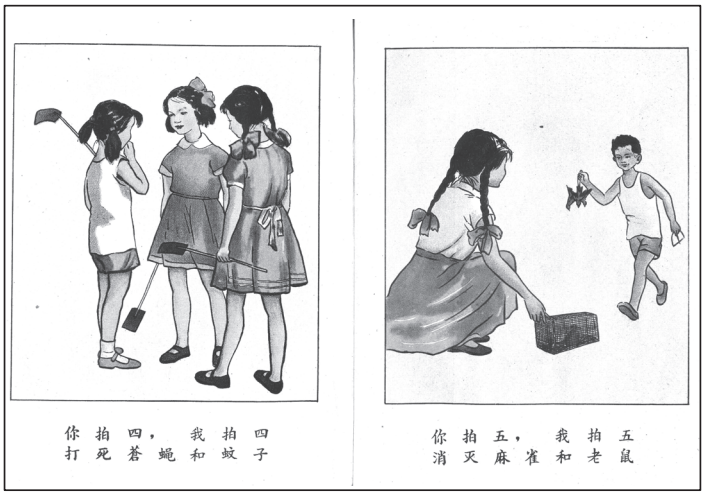
「おとながまちがったことをしたら、ぼくらは正す。痰を吐くのは不衛生なのだ！」と食い下がると、道ゆく人びとが集まり、みんなでおじさんを批判します。おじさんも観念して、「きみが正しいよ」と言うと、敏文はムッとした表情のままで去っていった。



こどもにとっての「おとないじめ」は楽しいことだが、やはりこども一人の舌の力だけでは戦力不足なのだ。最後には、正義を振りかざす野次馬たちという「騎兵隊」の登場による、集体の力が必要なのである。

四害で遊ぼう！





幼年期のこどもたちのためにも、衛生観念を歌で教える絵本が多数刊行されていた。いま、手もとには、1959 年に刊行されたものが二冊ある。ひとつは『衛生歌』（李瑋/絵図、遼寧美術出版社、1959 年 12 月、32 開）〔上図〕で、もうひとつは『乾々浄々身体好！』（きれいきれいで健康に！）（張鸞/画、中国少年児童出版社、1959 年 8 月、32 開）〔下図〕だ。いずれもこどもたちに清潔に心がけることを教えるカラー絵本だが、ほぼ同時期の刊行物でも、前者の「四害」は「蝇、蚊、鼠、雀」であり、後者は「蝇、蚊、鼠、シラミ」である。そこには、蝇たたきを振りまわし、殺虫剤を振り撒き、鼠取りを仕掛け、雀を落とすことに奔走していた、こどもたちの日常があった。







愛国衛生運動は、その後も継続して提唱されるが、関連する連環画や絵本や漫画は、各時代を通じて、数えきれないほど刊行されていたようだ。





1961 年の『講衛生　身体好』(伊凡/写、兪理/絵図、少年児童出版社、1961 月 9 日、32 開）も『衛生歌』に類する「児歌」を用いた絵本であり、環境を清潔にすること、規則正しい生活、身体の鍛錬などが説かれていて、「四害」は、蚊、蝿、シラミ、鼠となっている〔上左図〕。痰壷については、柄のついた蓋付きのものが描かれている〔上右図〕。

さらに下って、文革も末期の『愛清潔　講衛生』(張秋生/写、楊文義/画、上海人民出版社、1975 月 1 日）も、ほぼ同内容の「児歌」による絵本である〔下左図〕。「動員して、衛生を講究し、疾病を減少させ、健康の水準を高めよう」という『毛主席語録』からの引用が掲げられているのが、時代を反映している。痰壷も科学の発展とともに進化したものか、足踏み式で開閉するものが描かれている〔下右図〕。



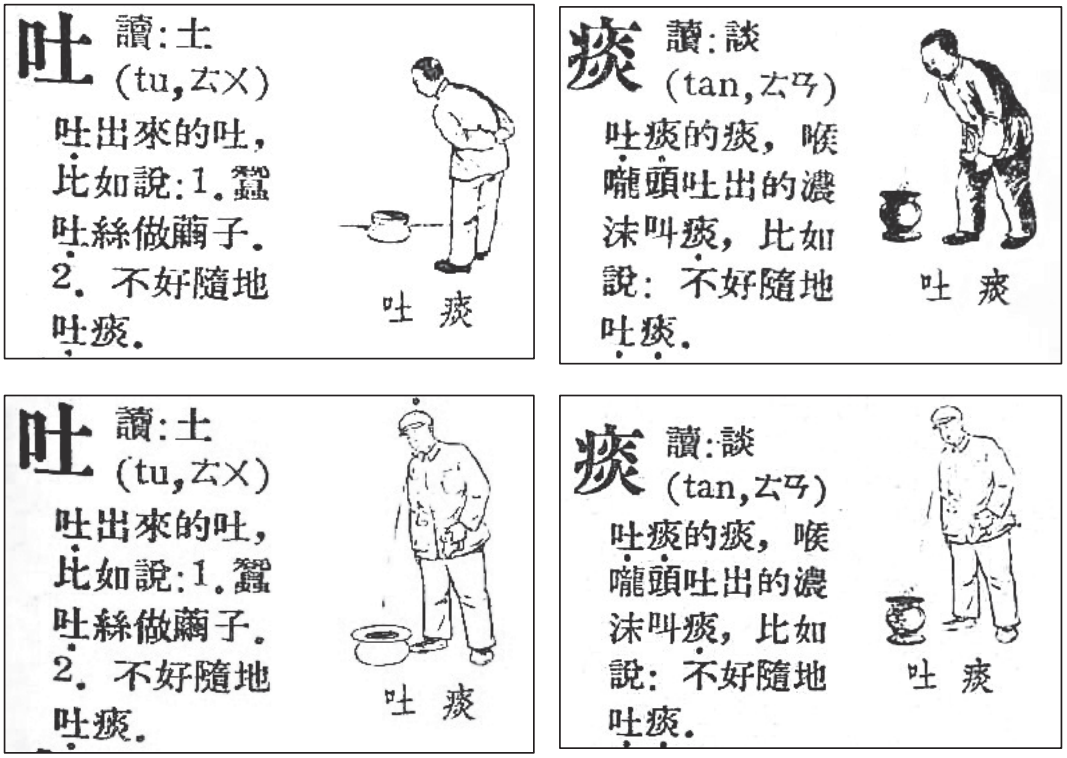


〈痰盂（たんつぼ）〉のある風景

ここに二冊の字典がある。ひとつは『挿図本　通俗小字典』（儲一、范涵/編著、上海東方書店/出版、通聯書店/発行、1952 年 2 月第 1 版、同年 7 月第 7 版）であり、いまひとつはその修訂版で、『挿図本　通俗小字典　修訂本』（儲一、范涵/編著、上海東方書店/出版、通聯書店/発行、1952 年 2 月第 1 版、同年 9 月第 13 版、1953 年 1 月修訂第 7 版）である。後者の奥付によれば、715000 冊の印数をかぞえる。

ほんの一年のあいだにおこなわれた「修訂」の詳細には、たいへん興味深いものがあるが、いまはみずからの関心に忠実に、いくつかの「挿図」を拾い上げてみよう。

ふたつの字典は、「吐」および「痰」という二つの文字について、いずれも「吐痰」という行為の図解をつけている。〔下図　上段が初版本、下段が修訂本〕



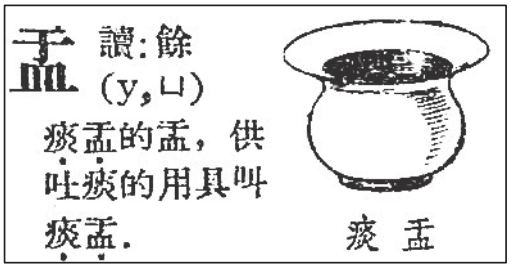
両者に共通しているのは、「吐」と「痰」にそれぞれ用いられている痰壺の形状が異なるものであるということだ。

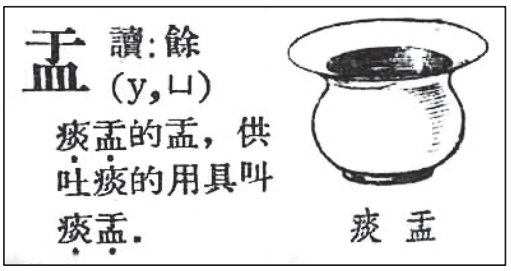
そして、両者で異なっているのは、痰を吐く人物である。1952 年版はいずれも帽子をかぶらず、「吐」と「痰」では、姿勢やアングルも異なったものが描かれている。

それに対して、1953 年修訂版は、人民服（中山装）を着て人民帽をかぶった人物が、些少の前傾姿勢で吐いている。「吐」も「痰」も全く同じ人物を流用したように見えるが、痰壷の形状が異なっているので、別に描かれたものであろう。

ふたつの字典の詳細な比較研究は、いずれまた機会を作って試みたいが、いま挿絵をザッと概観して言えるのは、初版における人物像には「農民」が多いのに対して、修訂版では、いわゆる人民服と人民帽を着用した人物像が多くなっているということである。このファッションが、人民共和国構成員たる新しい市民（かなずしも農民を中心としない）の、あるべき正装として提示されたものであろうか。痰を吐くのも、またそのような、新中国がデザインした人物像でなければならないのだ。

ちなみに、ふたつの字典は、いずれも「盂」の項目のもとに「痰盂」の図像を載せている。両者は全く同じ絵ではないが、基本的なデザインをそのまま踏襲して新たに描きおろされたものである〔下図　左が 1952 年初版本、右が 1953 年修訂本〕。





〈厠所（おべんじょ）〉〈馬桶（おまる）〉〈痰盂（たんつぼ）〉あるいは〈上吐下瀉〉といった、芸術の世界では、およそまっとうな画題としては扱われないオブジェも、衛生観念の啓蒙というテーマの連環画や宣伝画の世界では、立派な画題として成立していたし、絵師たち（その多くは、絵画芸術の世界では名も残さず消えていったであろう）は、それらをよりよく描くことを、みずからに厳しく課していたに相違ない。その思索と情念の系譜は、いまだ闇の中にあるが、上記の字典の挿絵を見ても、そこにはなんらかのこだわりや意地、すなわち〈思想〉が存在していたことは確実なのである。またいっぽうで、これらの書物に描かれる絵画は、博物画・科学画というジャンルそのものの伏流でもあった。そのあたりについては、また機会をあらためて考えよう。



『可恨的條蟲』（張竹生/絵画、1953 年 9 月）より